

# 大学図書館蔵書論

## Building a University Library Collection

堀 内 郁 子

*Ikuko Horiuchi*

### *Résumé*

Since the end of the war, librarianship in Japan have tended to put more emphasis on services rather than library materials. But no library service can be rendered without a good collection. To build a good collection, a well organized acquisition policy is indispensable.

Any acquisition policy statement should make clear at least the following five factors: 1. objectives of the university; 2. objectives of the library; 3. the location of responsibility for selection; 4. the location of responsibility for the book funds; 5. those who participate in selection.

The university library collection can be considered from the standpoint of the types of material in it; reference books, periodicals, books which reveal history and contemporary thought in all the subject fields that are studied in the curriculum, government documents, and recreational books. From the standpoint of the quality of the material, the library collection consists of classics, standard works, and special material for highly specialized research. From still other point of view, university library material can be divided into two great groups; those which extend the frontiers of knowledge and secondary or teaching materials such as texts, syntheses, introductory works, etc. More difficulties exist in selection of the first group of material.

In the process of building a library collection, planning, putting the plan into practice, examination and evaluation of the results are a series of essential activities. Evaluation is a final stage and at the same a starting point. There is no single standard measuring device for evaluation, and several procedures should be used to obtain a

more or less accurate picture of the status of the collection. The chief methods commonly used are: 1. a subjective or impressionistic method, asking opinions of persons who undertake evaluation, 2. check list method, i. e. check of holdings against standard lists and bibliographies, 3. identification of levels of collections, 4. check of current circulation records, 5. check of the records of materials requested and not in the holdings, and 6. check of the expenditures for library materials.

Nowadays many universities, especially private ones, are in extreme financial difficulty, and, since the library is expensive, it is often regarded as a burden to the university. But the same university thinks little of paying much money for the rental fee of a large computer or buying expensive laboratory equipment which will become obsolete very soon. The research library never becomes obsolete and is a permanent investment of the university. Bearing this in mind, the librarians should take courage in building a good library collection for both present and future needs.

(Japan Library School)

- I. は し が き
- II. 集 書 方 針
- III. 蔵 書 構 成
- IV. 蔵 書 の 評 価
- V. む す び

### I. は し が き

戦後米国の図書館学が日本に導入されて図書館界に影響を持つようになってから、日本の図書館活動もサー

ビスの面が強調され、図書館が書庫であるという考え方が排斥されるようになった。そしてレファレンスサービスとか、貸出し方式の研究等が盛んになり、目録法なども常に利用者の立場から検討され、目録係りの自己満足的な凝り方は非難輕蔑されるようになった。こういう傾向は歓迎すべきで、図書館の民主化であり、進歩であるといえることができる。しかしこれら利用者サービスの努力が成功するかしないかは、図書館の蔵書の質の良し悪しにかかっている面が多く、進歩的近代的図書館も、蔵書を中心としてそのまわりに色々なサービスを構成しているのである。よい蔵書を駆使することなくして図書館サービスはあり得ず、サービスが如何に強調されようとも、蔵書の重要性は少しも減少しないのみか増すばかりである。

図書館の蔵書はいうまでもなく1冊1冊の図書が集って構成されたものである。それはちょうど木と森のような関係である。図書館員は毎日木々にかこまれ、木々と取り組んでいるが、森のことは忘れがちである。木を見て森を見ずという言葉が図書館員にはよくあてはまる。よくあてはまりすぎるのではないかと思われるので、森としての大学図書館の蔵書を色々な角度から検討して、総合的な概念を掴もうというのがこの小論の目的である。

日本で戦後盛んになった図書館学教育のカリキュラムを見ると、分類目録、レファレンスワーク等と並んで、図書選択の科目が見られるが、この科目の内容は、個々の本の選び方、評価法等が主で、蔵書としてまとめられた全体の方向づけとか評価法とかが論ぜられることは少なく、他のどの科目でも取扱われていない。米国では一時“Building a collection”という言葉が盛んに使われ、個々の図書よりも蔵書としての図書館資料を強調した時期があった。図書館学校の科目名も、“Book selection”ではなくて“Building library collection”といっている学校が多い。ところが近頃は“Building a collection”という言葉がひと頃のように頻繁には使われなくなった。これは学問知識の急激な発達分化につれて、資料も急激に増大し、これに対処するために、大きな大学では、学部ごとに夫々図書館を作ったり、主題別に図書館を分けたりするようになって、夫々の図書館で個々の図書選択の方に重きをおくようになったことが一因であると見られている。<sup>1)</sup>

“Building a collection”という言葉は適訳がなくて日本語になりにくい、図書館の蔵書を造ることは、建

築において家を建てることによく似ていて、Building という動詞形で使われるこの英語は実態をよくあらわして便利な言葉である。蔵書とは雑多な本の単なる寄せ集めではなくて、一定の設計に従って組み建てられた機能的な建造物である。一つ一つの素材は調和のとれた1個の完成した物体を構成し、素材が夫々の存在を主張するのでなく、全体の中に融合していなければならない。よい家を建てるために一つ一つの材料を吟味するのは当然で、個々の図書の選択に努力することは、よい蔵書を造ってゆくという究極目標達成の前提条件である。しかし材料を吟味するだけで立派な作品ができるとは限らない。

統一のとれた建造物としての蔵書を造ることを究極の目標とするという考え方は、迂遠で抽象的で大変難かしいことのように思えるが、もしその建造物の設計がきちんとできていて、製作の手法、手順がきまっているならば、日々の作業はかえって容易になり、図書選択の偏向を是正するのに役立つであろう。

## II. 集書方針

よい蔵書をきずくには、組織的な集書計画、選択方針を確立することが必要であるが、それはちょうど家を建てるのに設計図が必要なと同様で、その必要性はいくら強調してもしすぎることはない。どこの大学でも何らかの方針があり、方針があるからこそ、出版物の洪水の中から何らかの選択がなされて、いくらかの資料が図書館に入って来るのである。しかしその方針をよく検討して明文化してある大学はどれだけあろうか。寡聞にして日本でその例を知らない。明文化することにより莫然とした方針に検討が加えられ、曖昧な点が明瞭になり、不備な点は補なわれる。このようにして成文化された方針は、大学管理当局、教員、図書館員等の承認を得て、正式な権威のある図書館資料収集の指針となる。この定められた方針は、集書の仕事に関係する人々全員に守られなければならない。方針の内容はよく理解されていなければならない。問題が起った時にはこの方針にたちかえって解決の手がかりとすべきである。例えばある文学作品がよいせつであるかないかというような問題はよく起り、こじれると裁判沙汰にもなりかねないが、図書資料として排除すべきものに関する原則が定められていると、問題解決が容易になる。<sup>2)</sup>良風美俗に反し、道徳的、倫理的基準に反する図書は排除する。選択の主たる基準は図書の全体としての価値にある。明らかに扇情主義の

売らんかなの図書は排除する。しかし、まじめな作品で、実生活のある側面の忠実な描写をするために粗野な言葉を使ったり、露骨である場合、必ずしもその部分のためにその作品を排除しなければならないということはない。<sup>32)</sup> これは米国のイノック・プラット公共図書館の図書選択方針の一節であるが、大学図書館でもあてはまり、特に図書の全体としての価値によって判断するということは重要である。序でに述べれば、イノック・プラット公共図書館の図書選択方針は非常によくできていて、他の図書館にも参考になるので、外部からの要求もあり、印刷して一般にも配布されている。公共図書館が住民の税金によって支えられているのは米国でも日本でも同じであるが、米国民は自分達の支払った税金の用途についてやかましく、日本人は払ってしまえばあとは一切おかまいなしという調子で両者の気風は異なる。米国では近くの公共図書館に自分の気に入らない本が入っていたり、また是非読みたい本が買ってなかったりすると、一々文句をつけたり、注文をしたりすることが多いので、図書館側としては防衛手段として、はっきりとした集書方針を作り、問題の本は方針にきめられているこれこれの理由で選択の際除外されたのであるとか、この本は賛否両論があったが、これこれの理由でこの図書館の蔵書として価値ありと認められたので購入したのであるという風に、集書計画、選択方針を盾にとって答弁している。そこで公共図書館の運営上どうしても必要なもので、どこでも苦心して方針を定め、不都合が起れば改訂してよりよきものを作っている。大学図書館では、利用者の苦情がこのような直接的な形で出てこないせいもあって、自館の集書計画、選択方針を成文とし、しかも外部に発表したりしている例は殆んどない。

図書館の集書方針は、個々の図書館の夫々の条件に従って樹てられるもので、標準となる手本があるわけではない。しかしいかなる図書館の集書方針でも必ず明確にしておかなければならない事柄は次の五つである。1. 大学の目的、2. 図書館の目的、3. 集書方針の決定と方針の遂行を監督する責任者は誰か、4. 資料費を管理運営する最終的責任者、5. 誰が資料選択に関与するのか。

大学図書館の蔵書を発展させるための集書計画は、その図書館の属する大学の目的に則ったものでなければならないことはいうまでもない。大学の諸機能のうちおもなものは、1. 知識の保存、2. 教育、3. 研究、4. 出版、5. 学外サービス（通信教育、公開講座等）、6.

調査研究の成果を社会へ適用すること等があげられるが、そのうち特に大学図書館に関係の深いのは、知識の保存と、教育および研究である。<sup>33)</sup> さらに具体的には、社会の指導者を養成し、学生の批判的精神を養い、役に立つ専門家を養成する等が考えられるが、これらの事柄は図書館にとってはまだ一般的、抽象的すぎて集書方針をきめるのに充分役に立たない。そこで次にあげる諸点の実態を掴むことが集書方針決定の助けとなる。1. 現在の蔵書の大きさと性格、2. カリキュラムの性格、3. 教授法、4. 学生数と学生の種類（男女、出身地、入試の難易の程度等）、5. 教員の数と性格（教育程度、研究出版活動等）、6. 図書館の構成（中央館か多くの学部図書館よりなるのか）等。

次に大学図書館の目的は何か。夫々の図書館が独自にかかげる目的を持っているわけであるが、どの大学図書館にも共通して言えることは、1. 大学の学生と教員の個人的学習研究に必要とする図書、雑誌その他の図書館資料を集めて利用に供する、2. 大学の教育計画に関連のある資料を集めて利用に供する、3. 過去及び現在において大学の教育及び研究計画に関係ある人々または業績に関する記録を収集して利用に供する、4. 大学の歴史、発展、特徴等に関するすべての資料を収集して保存する、等の事柄である。

大学図書館において集書方針の決定を行う責任は、教員がおうのが普通である。さらにその方針の適用、実行、解釈の責任も教員団がおうかまたは個々の教員が分担する。教員夫々の専門分野の資料は主として教員が選択し、教員が関心を持たない分野については図書館員が選択の責任を持つ。そして図書館長がそれらをまとめて全体としての調和統一をはかるというのが普通のゆき方である。しかし近頃の教員は非常に多忙であるし、また、膨大な量の多岐にわたる資料の知識に通暁することは難かしくなったので、実際に個々の資料の選択をするという細かい仕事にたずさわる教員は少なくなった。図書選択に精を出し、図書館の蔵書の育成に骨を折ったところで、教員としての昇進には関係ないので、この傾向は自然のなりゆきであろう。図書館側に経験豊富なエキスパートの館員をおいて、それらの館員が日常の業務の一部として毎日新しく出る本をしらべ、古書目録を点検してゆく体制をととのえれば、主題の知識があるからといって教員まかせの図書選択によるよりもよい集書ができる場合が多い<sup>4)</sup> とは米国の大学図書館員の方の意見のようであるが、これが果して日本の現状にあてはまるかど

うか。現状はともあれ、各教科に必要な資料については教員の意見に基づいて購入するとしても、一般的な参考図書や、教科外の図書、一般雑誌、教養娯楽書等の選択は図書館員が行なえるよう十分な見識を養うべきであろう。

資料費の管理、分配、運営の責任は図書館長がおうのが妥当である。そのためには図書館側は大学管理当局及び教授団から安心してまかせられる体制をととのえなければならない。

日本の学術研究体制全般について検討を続けて来た日本学術会議の学術体制委員会は、大学図書館についてもその改善充実の必要性を痛感し、政府に対して勧告を発した。その勧告の中の予算についての項では次の如く述べている。

図書予算は大学において、独立しておらず、本部予算に依存しているのが一般の状態であるが、図書館はその性質上、独立の予算とすべきである。とくに、図書数や利用度も漸次増加し、新しい機能（マイクロフィルム、視聴覚利用）も発達し、大学間の相互利用の機能も必要となるなど、独自の予算をもって、運営することを必要とする事業が激増している。

については、図書館独自の予算を計上し、施設費、図書購入費、物件費、修理製本費、目録作成費等、図書館において専門的に予算を組み、その経理を独自に行なうように制度を改めるべきである。<sup>5)</sup>

すでに図書館外部からこのような要請がなされている時、図書館自体内部からこのような体制をととのえる努力と運動を展開すべきことはいうまでもない。

誰が選択に関与するのかという問題に関しては、やはりその主体は図書館員であるのが望ましい。図書選択における役割という点から図書館を分類すると、三つの型に分けることができ、1.は自己抹殺型で、全面的に教員にまかせきっている図書館、2.は教員の選択に図書館が手伝いをし、意見も述べる図書館、3.は図書館の選択に教員が手伝いをし、自分達のほしい本を申し入れする図書館、の3種類である。戦前はどこ図書館でも大体第1の型でやっていたし、現在でも旧式の図書館にはこの型が多く、これらの図書館で図書選択にかかわる唯一の仕事は、既にある本を重複して買わないことで、あとは既に選択された本の発注受入れという事務的な仕事が専門である。近頃では第2の型の図書館もふえて来て、図

書館の主任司書程度の人が教員の図書選択会議に出席して発言する例がみられる。第3番目の型は、新刊案内や書評誌等の選択用資料を揃え持っている図書館で、夫々専門知識を持った図書館員が分担して、購入の候補資料をより出してファイルしておき、教員と図書館員からなる選択委員会が最終決定をする。図書館員によき人を得れば最も望ましいやり方である。学生、卒業生その他の利用者の購入希望の申し出も歓迎し、これらの希望も蔵書構成に反映すべきであるが、学生の希望が無視または軽視されている図書館がまだまだ多いのが現状である。

集書に関する基本的問題で次に大切なことは資料収集の範囲と深さの程度を、各学問分野ごとに定めることである。図書選択の権威 Periam J. Danton はサイコロのような六面体に見えるグラフを作って、各分野の資料を量と深さの両面から図示して見ることを提案しているが、<sup>6)</sup> 蔵書の状態を一目で見当をつけられるので面白い便利な方法であろう。

またコロンビア大学図書館では蔵書の深さをはかるのに基準となる五つの段階を設定して蔵書の質の評価と集書計画の明確化を計っている。その5段階とは次の通りである。

1. A basic information collection. 基礎的な知識を得られる程度のコレクションで、大学にとって主要な分野でないので、資料収集には限られた努力を払う。辞書、百科事典、ハンドブック等を最少限度に揃えて、ごく基礎的知識を得られるようにする。

2. A working collection. 学習用のコレクションで、ある主題分野の現代到達している知識の水準を示し、学部学習の必要をみたすことができる程度。その内容は、1種か2種の辞書、1種の百科事典、何冊かのハンドブックと年鑑類、選ばれた単行書等からなり、学部学生の専攻科目の学習にさしつかえない程度のコレクション。

3. A general research collection. 一般研究用コレクションで、大学院学生の学位論文作製や自主的研究に必要なものが揃っていること、即ち、数種の辞書、百科事典、主要ハンドブック、単行本、その主題分野に関係の深い何ヶ国語かの雑誌、書誌、索引誌、抄録誌等を含む。

4. A comprehensive collection. 一般研究用コレクションに加えて、新研究に役立つ単行本、歴史的研究に役立つ各国語の資料を包含するコレクション。翻訳書や、同一図書のあらゆる版までも揃える必要はない。文

書、手紙等の一次資料もある程度含まれる。

5. An exhaustive collection. そのコレクションの主題分野の資料については、どの国語のものもどの版も可能な限りすべてを網羅的に収集する。<sup>7)</sup>

エーモリー大学図書館長で大学図書館経営の泰斗である Guy R. Lyle は、その近著 *The president, the professor and the college library* で、集書計画に関して避けるべき四つのいましめを与えている。<sup>8)</sup> 傾聴にあたいする言葉なので簡単に紹介すると、第1は、蔵書を築く目標としては、蔵書の大きさ、総冊数ということあまり意味がないということである。A大学がB大学より1万冊余計に本を持っているということは、A大学の方が学問的に優れているということにはならない。B大学で優れた本のみを精選して購入し、毎年不用になった本を廃棄しているとすれば、B大学図書館の方がずっと質のよい蔵書を持っているのかもしれない。このことは理窟としては誰にでもたやすく理解されるが、実際にはひそかに総冊数をふやすことに汲々としている図書館が多い。何故なら図書館の総蔵書数とか、年間増加率の多寡が大学の学問的水準を示すように考えられやすいし、大学経営者達も蔵書数の多さを誇りとする人が多いからである。

2番目の教訓は、一流の大学図書館を作ることは一朝一夕でできるものではないということである。高等教育を受けようとする若者の数は年々ふえる一方で、当局者はそれに応じて、学生の収容人員をふやしたり、大学を新設したりして応急措置を講じている。そして最も緊急な問題は教授陣であることは誰にも異存はないが、聡明な責任ある地位にある指導者のほとんど誰もが図書館の重要性には気がつかない。よい図書館なくしては大学はあり得ないのに！とライル氏は慨嘆する。近頃方々の大学で学科の新設が盛んであるが、その場合新設学科に必要な資料の充実を計ることを忘れて性急に設立してしまうので、後になってギャップを埋めるために巨額の追加予算の必要に迫られることが多い。「約束の地」にはそのようにして到達し得るのではなく、日々の慎重な選択に基づいて徐々に育成され発展してゆくものである。

ライルの第3番目の教訓は、よい蔵書を築いてゆくには、既存の基本図書リストの類に頼りすぎではないということであるが、これは現在の日本の大学図書館員にはあまり適切な教訓ではない。何故ならば、日本ではまだ標準となるような大学図書館用基本図書リストができていないからである。参考図書については「日本の参

考図書」が購入のためのよりどころとはなるけれども、大学図書館用の基本図書リストとして作られたものではない。昨年日本私立大学協会から「大学図書館に必要な基本参考図書目録」が図書館研修会の資料として配布されたが、これは目録というよりは、自然、社会、人文の各分野の文献の簡単な解説をしたもので、収録タイトル数も少なく、ライルのいう総合的なチェック・リストではない。米国ならば古くから C. B. Shaw の *The list of books for college libraries* や C. M. Mohrhardt の *List of books for junior college libraries* 等をはじめとしてたくさんの権威あるリストが作られ、枚挙にいとまがない。ライルの言う通り、出来合いの図書リストに全面的に頼って、機械的にリストに載っている本を買ひこんでも、大学の要求にあったよい蔵書は築かれない。しかし推薦図書のリストは、自館の蔵書を検討・評価する手がかりとなり、足りない部分を補うのに有用である。また新しいベストセラー本にのみ注意を奪われる傾向をふせぐのに役に立つ。日本でも日本の大学図書館事情にあった基本図書リストが作られれば、使い方をあやまらない限り、大いに参考になると思われる。

ライルの第4番目の教訓は、集書の仕事においてある特定の個人が過度の権力をふるってはならない、ということである。たとえば有力な教授がワンマンぶりを発揮して、図書の購入を1人で支配すると、他の若い教員達は発言意欲を失って、図書選択に無関心になりやすい。多様性のあるバランスのとれた蔵書をつくるには、教授であれ、図書館長であれ、特定個人の色彩のみが強調されるのを厳重にいましめなければならない、この教訓がまもられないために、片寄った特殊な資料が集ったり、ごく専門的な研究用の資料ばかりが集められて、学生のための学習用の資料がおろそかにされている図書館の例は少なくない。

欧米の一流の大学図書館をおとずれたことのある日本の大学図書館員はその進んでいるのに驚嘆するが、米国の図書館員の中にも図書選択の仕事については非常に悲観的な見方をする人もある、たとえばケンタッキー大学図書館長の L. S. Thompson は「19世紀末に当時の図書館員や教授達が最善をつくして集めた大学図書館の資料が、現代では殆んどかえりみられることもない、したがって当時の選択は大部分失敗であったということになる。我々の現代の大学図書館は冊数ではその頃よりふえているかもしれないが、それらが21世紀において、19世紀の蔵書が現代の我々に意味する価値よりも、もっと価

値を増しているだろうとは誰も保証できない。<sup>9)</sup> といっている。米国よりは充分立ちおくれている日本の大学図書館界の現状では、やはり悲観的立場をとらざるを得ないけれども、最近の東京大学図書館におけるが如く、近代化を目ざして華々しく大規模な改革に着手した例もあるので、日本の大学図書館界も徐々にではあるが前進していると判断してもよいのではなかろうか。東大図書館ではすでに建物の大改造は完了し、学内の総合目録もできたときく。蔵書づくりの仕事の面でも革新の成果をあげてほしいものと外部からの期待は大きい。イリノイ大学の図書館長 Robert B. Downs 氏は、<sup>10)</sup>「後世の人々は、我々が作ったりっぱな目録や分類体系、貸出し方式、レファレンスサービスの技術等については、多分何も言わないであろうが、我々が保存し彼等に譲り渡していった資料に対しては、非難したり、あるいは称賛し感謝したりするにちがいない。」<sup>10)</sup> といっているが、蔵書造りの仕事はこのように歴史的にも重要な意義をもっている。現代の教員や学生のためによい資料を集めて彼等の研究学習に役立てると同時に、我々の子孫たる未来の教員や学生に喜んでもらえるような集書ができたとしたら、たとえ安い給料で文字通り陽の当なぬ場所で営々と働いていても、子孫に美田ならぬ文化遺産を残してゆく大学図書館員は、以て瞑すべきであろう。

### III. 蔵 書 の 構 成

大学図書館の蔵書はどういう資料からなりたっているのであろうか。はしがきで蔵書は1箇の建造物であると述べたが、その見方に従えば、1軒の家のように、土台があり、その上に骨組みがあり、各部屋ができていえることができる。土台の部分は、時間と場所を超越した価値をもつ古典からなりたっており、それらの基本的な図書なしにはどんな図書館の蔵書も完全ではあり得ない、この土台の上に柱が立ち主要壁がのるわけであるが、この部分にあたる資料は、優秀な標準的な図書で、将来古典となるものと、何らかの事情で古典にはなり得なかったものとがまざっていることであろう。これらは古典よりは数が多く、骨組みと囲いをなし家の形をととのえる役割を果たす、さらに専門的資料、特殊資料等で各部屋ができ、造作がととのって、蔵書の特殊性が備わるわけである。

以上は図書館資料を質的に見たのであるが、資料をタイプ別に考えてみると、基本的なものとして、まず第一に参考図書群があげられる。各学問分野の専門家達にも

日々使われる一般的百科事典の主なもの、辞書類、ハンドブック、一般書誌、主題別書誌、雑誌記事索引等がこのグループに入る。これらの重要参考図書は、個人個人で持つにはあまりに高価でかさばるので、図書館に備えてつけて大勢で利用するのが合理的である。また事実に関するインフォメーションは正確で新しくなければならぬから、参考図書類には絶えず、新版、改訂版を加えてゆかなければならない。これにも随分費用がかかり、個人での入手は困難である。

参考資料や一般書誌類と密接な関係のあるものに一般雑誌および学術雑誌がある。調査研究図書館である大学図書館における逐次刊行物類の重要性はいうまでもない。科学者が引用する文献の95%は雑誌または学会の出版物であるという。<sup>11)</sup> 雑誌には各界の権威者のオリジナルの論文あり、ニュースあり、新知識の解説あり、文献の紹介ありで、一般教養のためにも調査研究のためにも欠くことのできない知識、情報等が含まれていて、後に出てくる代替品で間に合うという性質の資料ではない。図書館の規模が大きくなる程、雑誌類についてやされる費用の割合も大きくなる。高価なものであるから、選択は厳密でなければならず、管理、保存、利用等、あらゆる方面での方針を確立しておかなければならない。

政府および都道府県で出す官公庁出版物、および諸外国の政府刊行物も亦おびたしい量にのぼり、これらの中には調査研究に不可欠なものが多い。国勢調査とか経済白書等の大がかりな調査統計資料は、政府の組織や権力をもつてのみ刊行できるもので、新しい信頼できる事実や数字がこれらの資料からでなければ得られない場合が多い。市販されている一般図書については、図書館員は手をつかねて本屋が見計らいで持って来る本を買っていても、新刊物のめばしいものはかなり入って来るが、政府刊行物はそういう受動的な姿勢では絶対手に入らない。まずどういうものが出版されているかその存在を知る事がむずかしく、自分の図書館に有用なものを選ぶこともむずかしい。ほしいものがきまっても、その入手にもまた手がかかる。本屋を通して買えるもの、政府刊行物サービスセンターで扱っているもの、直接担当役所をお願いしてわけてもらうもの等、いずれにしても普通の入手ルートにのらず、特別扱いをしなければならぬ。やっと入手しても、利用されやすいよう整理するのにまた色々の問題がある。そこで大きい図書館では政府刊行物の課を別置して専門係員をおき、これらの問題一切を取扱わせている所もある。

大学図書館ではいわゆる學術書即ち各教科で取扱う學問分野の歴史と現状を示す資料が大きい部分を占める。學問の世界では言語や國境を越えて知識と真理を追求するので、資料の追求も亦それに対応し外國の出版物も入手しなければならない。おおげさに言えば、資料の選択は全世界の総出版物を対象とするのである。世界の學問と文明という見地から大学図書館の蔵書を考える時、非常に大きくむずかしい問題につきあたる。それは世界中において學問と文明のために現在および未来に必要なとする文獻の種類と量はいかなるものであるのか。日本一國ではどういふ文獻をどれ程保有すべきであらうか。1大学の図書館としては何を持つべきかということである。このような重大問題に満足な解答を持ち合わせる人はどこにもないであらうが、研究図書館としての大学図書館は、広い視野に立った集書の基本方針確立のためにこれらの問題にとりくまなければならない。それには他大学図書館は勿論學識者の協力が必要である。

教科と関係のない小説その他の娯樂教養のための資料は大学図書館におくべきか、おかざるべきか。これには賛否両論があって結論がでない。反対する理由としては、大学4年の課程は、社會人として指導的立場に立つ準備段階であり、まじめに課された學業を修めるためには、課外の読書をする時間はあまりない筈で、大学では娯樂的読書は重要ではない。大学図書館は公共図書館の役割を果たすべきでなく、公共図書館といえども娯樂読物にのみ重点をおくのは疑問がある。誰も娯樂的読書に反対する者はないけれども、限られた大学図書館の圖書費で買うには疑義がある。

この議論には一面の真理を含んでいるが、これに反対する意見もある。マスコミ攻勢にとりまかれた現代の學生は、輕文化、輕娯樂とのみ結合しがちで、読書を非常に重いものとして敬遠する傾向がある。本とのつきあいは、各科目に及第して単位をとるのに必要な最低限度にとどめ、あとは感覺的、剌激的消費文化に身をゆだね、人間にとって最も基本的なものに対する探求心を失ないがちである。このような弊害に対処するために、教科で点数をとるためでない読書を奨励する。そのための小説、非小説類を図書館に揃えておくことは望ましい。教育は教室の勉強でのみ得られるものではない。このような目的で購入する圖書の選択も學術書の選択に劣らずむずかしい。出版社の誇大な宣伝広告や、世間でのとりざたにまよわされず、長く価値のあるものを選ばなければならない。新刊書の中でどれが教育目的にかなうか

ということをきめようとするよりは、あらかじめ圖書予算の中ごく限られた額を娯樂圖書費に割当て、その金額で何を買うべきかをきめる方がたやすい。

以上は蔵書の構成を資料のタイプ別に考えてみたのであるが、さらに別の観点から見ると、図書館資料を二つの大きいグループに分けることができる。大学の最も重要な機能である研究活動と教育活動という観点から資料を見ると、第1のグループは學問知識の進歩發達に貢献する資料、または學者がこのような貢献をすることを可能ならしめる資料、第2のグループはそのような貢献をしないもので、教科書、概論、入門書、伝記等教授用の資料である。第1のグループに属するものは、既存の知識のむしかえしではなくて、何かしら新しいものをつけ加えた単行書、研究報告、調査研究に役立つ文書、写本等がある。勿論教授用資料として第2グループに属するものにも研究に役立つ資料があり、第1グループに属する資料も學生の学習用に使われる場合もあって、二つのグループの間に明確な線を劃することはできない。しかし、たとえば Shakespeare の First Folio の書誌學的研究は英文學科の學生には必要でなく、Shakespeare 研究家にとってのみ必要な資料であらう。大学図書館にとって厄介な仕事は調査研究のために必要な資料を選択することである。そういう資料は普通非常に高価でしかも利用される頻度も少ない。そこで大学図書館としてはこういう資料に対して価値の規準をしっかりときめてかかる必要がある。大学図書館は教授と研究を進めるためのサービス機関であるというたてまえを堅持し、記念品や骨董品を保存したり陳列したりする博物館的傾向にかたむくべきではない。本の稀少価値は図書館としての価値の基準とはならない。したがって一般的には古い版よりも最新版を選ぶべきである。多くの本は、ベストセラー的な性格のものでなく學術的なものであっても、出版された直後に最も需要が大きい。利用者が最も関心が強く読みたいと思っている時にその本が用意されていなければ、讀者の要求はみたされないことになる。Pierce Butler は「著作がまだ生きているうちにその生命を開発するのが図書館員の役目である」<sup>(12)</sup> といっている。古くなくても値打のある本はおそかれ早かれ必要になり、必要とわかった時には絶版となり、骨折って入手しても値段が高くなるのが普通である。新しく出る重要なものはもれなく購入する方針を堅持していれば、後に古い本を集める仕事が簡単になる。しかし圖書予算を充分に持っている図書館でも、新しい本は要求が出るまで買うべ

きでないと主張する人もある。その理由は、いくら慎重に判断しても、新刊書には一時的な価値しかないものが多い。故に年月がその有用性を証明したもののみを購入すべきである。もし本当に重要な出版物であれば、増し刷りされたり、新版が出たりして、結局入手することができるであろう。よし絶版になっても、昨今のように複写技術が発達していれば、ゼロックスコピー等で読むことができる。このような意見にも一面の真理はあるが、あらゆる資料にあてはまるものではなく、科学技術の分野の資料と人文社会関係の資料では新しさに対する態度が異なり、新しさを生命とする資料も多いので、一般的な傾向としては新しいものに重点がおかれている。

写本、稿本等稀こう書といわれるような資料は重要な研究資料である場合が多いが、それらの内容が出版された後は、研究図書館にとっては価値が少なくなる。蟬のぬけがらのようなもので、蒐集家の興味の対象とはなるかもしれないが、大学図書館では必要でなくなる。高価な稀こう書を購入することは図書館にとって宣伝材料にはなるが、学問の進歩発達には役立たない。しかし例外として、ある特定の著者の本を網羅的に集めている図書館で、ほんの1、2点欠けているものが手に入るという時は、高価でも購入した方がよい場合もある。とても手の出ない程高価であれば写真複製という手段もあるが、複製品の限界も考慮しなければならない。いずれにしても、大学図書館は学術的価値という立場に立って、書籍業界の商魂や投機家のおもわくに影響されず、珍本奇本の法外な値上りをふせぐ勢力でありたい。

#### IV. 蔵 書 評 価

図書館の蔵書作りの営みとして、計画、実践、反省、評価という一連の活動が重要なことはいうまでもない。評価はこの一連の活動のしめくくりをなすもので、蔵書づくりについて計画されたことが実践に移され、その実践がいかに有機的に、そして動的に運ばれているかということを反省し、この結果を位置づけるところに価値がある。しめくくりであると同時に、この結果に基づいて集書方針の改善をはかる新しい出発点でもあって、蔵書の進歩発展を希う限り必要不可欠の活動なのである。しかしこの蔵書評価ということも、集書方針を作ることと同様どこ大学も殆んどやっていないのが実情のようである。

図書館の蔵書の評価のみならず、学校の教育活動評価、企業体における経営の評価等、各種の評価法はアメ

リカでまず発達した。合理性と能率を貴ぶ国柄が発達を促したものと思われるが、総合的、客観的評価法、基準等を作り出すのに多大の努力を払い、それがかなり成功している。しかし図書館の蔵書の評価としてはまだ特にきめてとなるような単一のよい方法は見出されず、その困難さが訴えられている。困難にも拘らず多大の努力を払って評価を行った例が幾多報告されており、その努力は色々な形で成果をもたらしている。例えば、1930年にシカゴ大学で図書館調査を行ったが、この調査には同大学の教員約200人を動員し、数ヶ月を費したという。また既存の書誌類400種を検討し、それらをもととしてあらたに基本図書リストを作って評価のものさしとした。この調査に要した費用は400万ドル（邦価約12億円）であった。<sup>13)</sup> いかに大規模な徹底的な調査であったかがわかるであろう。

このように大学内部の人が自分達で調査を行なう場合もあるが、外部からその道の専門家を依頼して評価を行う場合もある。この方面でもっとも有名で幾多の業績をあげたのはもとシカゴ大学の図書館学校長 Louis R. Wilson で、スタンフォード大学図書館の調査<sup>14)</sup>をはじめ各地の大学図書館の調査を行って報告書や論文を書き、それらは大学図書館の評価を論ずる場合必ず引用される重要な文献となっている。

評価という言葉は比較的新しい言葉なので莫然と使われることが多いが、その意味は何であろうか。評価とは価値をきめることである。数量を計ることによって量的価値をしらべたり、分析、比較、解釈等の方法で質的な価値を見定めようとすることもあり、両者を併用することもある。しかれば何の価値をきめようとするのであるか。ものの“よし”“あし”と同様、客観的、絶対的価値というものとは存在しないので、評価をするにはまず価値の考え方をはっきりしておかなければならない。主な価値の種類として、経済的価値、倫理的価値、美的価値、社会的価値というようなものが考えられるが、これらのいずれもが図書館活動に関係があり、蔵書の評価にもかかわりがある。しかし図書館のタイプにより重点のおき方は異なり、児童図書館、学校図書館では道徳的、情操的価値が重要であり、大学図書館や研究図書館では知的価値に重点がおかれる。

評価の方法としてまず考えられるのは、適当な人に依頼してその人の意見を徴することである。1人または数人に図書館の目的方針をよく説明し、その目的方針に照らして蔵書を点検してもらい、その長所や欠点を指摘し



てもらう。その場合価値の基準は調査者の学識とか理性に頼るわけで、調査者として適当な人としては、図書館員、学者、学識経験ある図書館外の人等が考えられる。この方法は測定するための道具や客観的データを使わず、もっぱら調査者の主観に頼るのであるから、印象的評価法と呼ぶことができる。この方法がうまくゆくかゆかぬかは、評価する人の優劣、適不適にかかっていて、該博な知識を持つ人であることは勿論、偏見のない、図書館事情に通じた、文献に詳しい洞察力のある人でなければならない。前記 Louis R. Wilson はこれらの資格を兼ね備えた優秀な学者であったから、多くの大学図書館調査を行い、それらの図書館のその後の改善発展に多大な貢献をなし、報告書等を通して他大学図書館にも示唆を与えた。勿論 Wilson の用いた方法は単に印象的方法のみでなく、適切なデータを集め、多面的な評価を行ったのであるが、評価をするのに最も適格者であるという点でまず思い出される第一人者である。また最近来日して東京大学図書館の改善について勧告を行った元ハーバード大学図書館長 K.D. Metcalf 氏も亦多年の経験と学識をもったまたと得がたき人物である。Metcalf 氏に打ち込んだ故前東大図書館長岸本英夫氏の慧眼にも敬意が表される。

第2番目の方法はチェックリストを用いる方法で、前述したように米国ならば Shaw のリストとか、ハーバード大学の Lamont College の書冊体蔵書目録等に照らし合せてみる方法である。基準となるリストに載っていて自館にない図書のリストを作り、このリストに載った個々の図書について、夫々専門分野の教授に判断してもらい、非常に重要な資料では非なければならぬもの、ある方が望ましいもの、この大学にはなくてもよいものというような順序をつけてもらう。このような手順を踏んで蔵書を評価する方法は、副産物として、教員が図書館の蔵書の内容をよく知るようになり、関心が高まり、以前は図書館にあることを知っていたけれども、その後存在を忘れてしまっていたような資料を思い出すようになる。この方法は実施は比較的簡単でやさしいが、欠点もあり、得たる結果を解釈判断するのがむづかしい。基本となるリストは示唆的なもので、これだけの資料を持つべしと規定するような性質のものではない。リストそのものをよく評価して、その長所と欠点、限界等を見きわめるのが先決問題である。またリストが出来上った時には既に新しい出版物が次々と出て、リストは時代おくれとなる。リストの資料を各分野ごとに検討して、その大

学においていない学部の領域は無視し、その大学で特に重視している領域は、リストに収録されているだけでは足りないので、別の専門書誌なり他の方法で補なわなければならない。この方法では基本リストに載っていない資料がどれどれであるかがわかるだけで、リストに載っているよりもっとよい資料を持っていたとしても、その事はこの方法では表示されない。基本リストを使うということは、どこの大学図書館でも中核となる重要資料は同じであるという前提に立つが、これは、各大学図書館は夫々の大学の特殊性に応じて最も適したサービスを行なうべきであるという考え方に矛盾し、どの図書館の蔵書も規格にあった既製品的なものになってしまうおそれがある。基本リストは新設される図書館や、小さい大学図書館には有用であるが、図書館が大きくなる程利用価値が減少する。大規模な図書館ではシカゴ大学でやったように、これら基本リストを参考にして、自館の条件にあった新しいリストを作らなければならない。

第3番目には、夫々の学問分野のコレクションの程度を確めることで、これには集書方針の項で述べたコロンビア大学で定めた5段階の規程が参考になる。

第4番目に考えられる評価法は、資料の利用という観点から評価する方法である。もし読書の目的と効果が分析できれば、利用による評価を行うことによって、個々の資料の知的、倫理的、経済的、社会的価値を測定することができる。しかしこの分析の困難なところにこの方法の欠点がある。この方法では本の貸出し数の統計が評価の材料となるので、測定は数量的、客観的である。しかし単なる貸出し回数だけでなく、図書館の目的とその目的にあった資料という点を考慮しなければならない。もし大学図書館でベストセラーの娯楽読物が盛んに借り出されて貸出し数がふえているとしたら、貸出し数は知的価値と関係がない。そのせいか、公共図書館の方が大学図書館よりも貸出し統計を出す事に熱心で、大学図書館ではあまりこの方法は使われていない。この点について代表的な研究に、現在南カリフォルニア大学図書館長の Lewis Steig という人の *A technique for evaluating the college library collection*<sup>15)</sup> という論文がある。これによると、蔵書が充分であるか否かは学生教師の図書館利用と直接関係があり、図書館の館外貸出記録は図書館利用の実情を示すものであるという想定のもとに Hamilton College という単科大学で3ヶ年にわたる大規模な貸出記録の調査を行った。その結果見出された結論は、1. 貸出された資料の75%は1年に1回しか借り

出されず、約10%が3回以上借り出されている。故に役に立つ資料がかなり巾広く充分にそなえつけられているとみなすことができる。2. 3年にわたる調査でわかったことは、毎年きまって使われる本というのはごく少ない。つまり学生は広く色々な本を使っている。3. 貸出された本の80%は比較的新しく出版された本である。新しく見出された知識、情報、古い事実の新解釈が重要視され、図書館はよく新しい資料を入手していることを示す。4. Shaw List にあげられていた図書の利用は、リストに含まれていない図書にくらべて特に多いということはない。したがって有用な本は何であるかを探すのに Shaw List はあまり役に立たない、等である。

貸出し回数ということは勿論蔵書の質のよしあしにも関係があるが、探し易くうまく配列してあるとか、貸出し規則が簡単で借りやすいとか、通俗的な面白い本が沢山揃っている等の要素も影響してくるので、蔵書の評価としては補助的な方法ではあるが、他の方法で評価した結果を裏づけするには有用である。

第5番目の方法は、利用者から求められた資料が蔵書中になかったため、要求がみたされなかった場合を記録しておき、その記録を検討すること、また図書館間相互貸借の記録をしらべることも、蔵書の評価に参考になる。これらのことは多くの図書館であまり実行されていないが、励行すれば、蔵書の改善のみならず、サービス全般の向上に有効である。

第6番目に考えられる方法は、資料費に焦点をあてて評価する方法である。各分野別に費やされ金額、大学全体の予算の中での資料費の割合、年間の増加額、他大学図書館との比較等専ら数量的データによる。これは、よい蔵書は充分な予算がなければ築くことができないという前提に立っているが、同じ金額をどのくらい有効に使ったかという面での評価ができないところに弱点がある。しかし極端に図書予算の少ない大学において、この方法によって見出された結果は、管理当局者を説得するよい材料となり、他のどの方法よりも有効である。

いずれの方法によるにしても、蔵書を評価するには、多くの時間と費用を要するので、人手も費用も不足の場合、蔵書の大体の傾向を調べるにはサンプリング法ということも考えられる。一つの方分野で5,000タイトルある書誌から500を抽出し、図書館の同じ分野のコレクションから500を抽出して比較すれば、5,000タイトル調べた場合と大体同じ結果が得られるであろう。また蔵書の中のごく狭い分野を詳しく調べて全体の傾向を類推する

ことも考えられる。勿論これらの方法には不備な点があるが、大がかりな調査をすることができない場合には考慮することができよう。

以上述べた蔵書評価について要点をまとめてみると、

1. 評価は確かに有効であり必要であるが、評価を行なうのは真にその必要性が痛感され、評価することが有効であると信じられる時に限るべきである。蔵書が貧弱で充分役に立たないと思われる時、図書費が不足の時、利用者や管理者の不満が大きい時等がそういう場合であろう。

2. 一度評価を行うと決定したら、調査すべき事項を正確に分析し、決定する。各分野における蔵書の質、蔵書の範囲、集書方針、実際の発注状況、新刊書をどの程度含んで蔵書の新鮮さを保っているか、利用の状況等。この分析を行なう際、大学で重視するその大学の特殊性、価値の基準等も決定する。

3. もし自館の関係者が評価するのでなく、学外者に依頼する場合は充分資格のある人を選ぶ。図書館と密接な関係にある人や、書図館の問題に理解のない人は避けるべきである。

4. もし自分達で評価を行なう場合は、はじめに目的、方法を確立し、関係者の意見を一致させてから着手する。

5. 定められた目的に最も適した方法を選び、できれば裏づけとして別の方法も同時に採用することが望ましい。できあいのリストや表を使うことを避け、自館にふさわしい独自の方法で行なうこと。

6. しらべた結果を解釈するには、すべての要素を考慮し総合的であることを心がける。結論として出すべき事柄に都合のよい事実だけをとりあげてはならない。

7. 出た結論が図書館にとって好ましいものであっても油断は禁物で、聡明な図書選択のみが蔵書の質を維持するもので、質の低下はたやすく起りやすい。

## V. む す び

以上で大学図書館の蔵書の向上のために考慮すべき事柄を略述したが、図書の廃棄ということにふれなかった。これは図書の収集と表裏をなし、蔵書の新鮮味を保つために重要であるが、これについてはまた別の機会にゆずる。

今やいかなる大学でも、その経営は困難をきわめ、物価の高騰、諸経費の増大で特に財政は苦しく、ともすれば図書館は金のかかる不経済なものとして厄介視されや

すい。しかし一方では電子計算機や新しい実験設備等に多大の費用をかけており、そのような費用の支払いにはあまり抵抗が感じられていない。しかもこれらはきわめて短日月のうちに、例えば5年ぐらいいで、時代おくれの廃物ともなりかねない。図書館の蔵書のためについやされた費用は、大学の所有する数少ない資産の一つを形成する。蔵書全体の値打はその部分部分の合計よりも偉大である。新しく蔵書に附加される図書は、さきに入っている仲間の値打を高め、また仲間達によって自らの値打も高められる。もし大学がその優秀さを誇り、図書館が学者達によりサービスを行なう覚悟があるならば、いたずらに図書館予算の増大を恐れてはいられない。確かに大学、特に私立大学の経営は苦しく、学内でどうやっても解決のつかない所まで来ている。前にもふれた日本学術会議の「大学図書館の整備拡充について」の勧告でも、「次の諸点について適切な措置を講ずるよう勧告する。」としてまず第一に、「大学図書館の蔵書を充実するために、必要な財政的措置を講ずること。」<sup>16)</sup>と述べている。大学図書館員は学内のみに目をむけて天地に踴躍することなく、学外のこのような理解あるグループとも提携し、勇気と確信をもって蔵書づくりのために積極的に働かなければならない。(図書館学科)

- 1) Nesbit, Elizabeth. Books for children and young people. <Illinois. University. Graduate School of Library Science. The nature and development of the library collection. Champaign, Illinois, 1957> p. 26.
- 2) Enoch Pratt Free Library. *Book selection policies*. 2d rev. ed. Baltimore, Md., 1961. p. 11.
- 3) Wilson, Louis R. and Tauber, Maurice F. *The university library*. 2d ed. New York, Columbia Univ. Press, 1956. p. 348.
- 4) Fussler, Herman H. "The larger university library," *College and research libraries*, vol. 14, Oct. 1953. p. 366.
- 5) 日本学術会議. "大学図書館の整備拡充について(勧告)," *日本学術会議月報*, 2巻, 5号, 1961. 5, p. 20.
- 6) Danton, J. Periam. *Book selection and collections: A comparison of German and American universities*. New York, Columbia Univ. Press, 1963. p. 114.
- 7) Tauber, Maurice F., et al. *The Columbia University libraries*. New York, Columbia Univ. Press, 1958. p. 260-1.
- 8) Lyle, Guy R. *The president, the professor and the college library*. New York, Wilson, 1963. p. 33-9.
- 9) Thompson, L. S. "The dogma of book selection in university libraries," *College and research libraries*, vol. 21, Nov. 1960. p. 442.
- 10) Downs, Robert B. Problems in the acquisition of research materials. <Randall, William M. ed. *The acquisition and cataloging of books*. Chicago, Univ. of Chicago Press, 1940> p. 75.
- 11) Osborn, Andrew D. *Serial publications*. Chicago, A.L.A., 1955. p. 9.
- 12) Butler, Pierce. *An introduction to library science*. c 1933. p. 99.
- 13) Bach, Harry. "Evaluation of the university library collection," *Library resources and technical services*. vol. 2, Winter 1959. p. 25.
- 14) Wilson, Louis R. and Swank, Raynold C. *Report of a survey of the Library of Stanford University for Stanford University, November 1946-March 1947*. Chicago, ALA. 1947. p. 222.
- 15) Stieg, Lewis. "A technique for evaluating the college library book collection," *Library quarterly*, vol. 13, Jan. 1943. p. 34-44.
- 16) 日本学術会議, *op. cit.*, p. 18.